

M(エム)

2008(平成20)年9月12日鑑賞(松竹試写室)

★★★



監督＝イ・ミョンセ／出演＝カン・ドンウォン／イ・ヨニ／コン・ヒョジン／チョン・ムソン／ソン・ヨンチャン／ソ・ドンス (エスピーオー配給／2007年韓国映画／109分)

……映像美を追求する巨匠イ・ミョンセ監督が、時代劇の『デュエリスト』(05年)とは全く異質の白日夢のようなラブストーリーに挑戦！ 現実か白日夢かは、何となくわかる程度でオーケー……？ ストーリーへの興味はほどほどに、凝りに凝った映像美と美しく流れる音楽との融合に注目したい！ とりわけ、路地とマンションそして日本料理店の映像美はしっかりと……。

「M(エム)」あれこれ

この映画のタイトルは、原題も英題も邦題も同じ『M(エム)』。映画の冒頭、謎の美少女ミミ(イ・ヨニ)のナレーションによって、Mの文字から始まる人物紹介がされるが、私にとっても「M」は馴染みのある言葉。

それは、「いつも一緒にいたかった……」で始まる、プリンセス・プリンセスの1989年のヒット曲『M』がカラオケにおける私の愛唱歌の1つだから。同じタイトルの曲を浜崎あゆみも歌っているが、これは賞に縁のない平凡な曲(?)で、私における「あゆ」の愛唱歌は『LOVE～Destiny』と『SEASONS』の2曲。

プリプリの『M』は、「消せないアドレス、Mのページを指でたどってるだけ……」の歌詞が切ない名曲だが、映像美の巨匠イ・ミョンセ監督が映画『M(エム)』で描く白日夢とは……？ じっくりと、「M」あれこれを味わいたいものだ。

主人公は？

『M』の主人公は、若手のベストセラー作家ハン・ミヌ(カン・ドンウォン)。婚約者ウネ(コン・ヒョジン)との結婚を控えた今、彼は極度のスランプに陥り、不眠症

に悩まされていた。ダンディなスーツと黒フレームのイキな眼鏡、そしてしかめた眉間と常に口元から吐き出す煙草の煙は人気作家に不可欠なスタイルと雰囲気だが、それが幅を効かせたのは作家として絶頂期にある間。したがって、いつも誰かに見られているという恐怖感による神経過敏症がひどくなっている今は、そのダンディさもかなりヤバイ状態……。

これが同じカン・ドンウォン？

そんなミヌを演ずるのは、『オオカミの誘惑』(04年)で大フィーバーした韓国の若手イケメン俳優のカン・ドンウォン(『シネマルーム7』122頁参照)。その後私はカン・ドンウォンを、殺人犯として服役し、早く殺してくれることばかりを願っている死刑囚の男を演じた『私たちの幸せな時間』(06年)(『シネマルーム13』99頁参照)と、眠狂四郎ばり(?)のニヒルな青年剣士“悲しい目”を演じた『デュエリスト』(05年)で観ている(『シネマルーム10』117頁参照)が、私が観たこの3作におけるカン・ドンウォンの役柄は全然異質なものを。

したがって、ちゃんと解説を読まなければ同一の俳優とわからないほどだったが、『M(エム)』におけるカン・ドンウォンは……？これが、あの過去3作で私が観たカン・ドンウォンと同じカン・ドンウォンとは……？

ストーリー展開の主導権はミミが

映画は紫色のかわいいワンピースを着た少女ミミのナレーションから始まるが、ミミがスクリーン上で語るセリフはほとんどなく、ナレーションだけ。それは一体なぜ……？また、ミミはミヌを見ているのに、どうもミヌからミミは見えていないよう。それは一体なぜ……？

この映画の主人公は不眠症に悩み、現実と白日夢の世界を行き来するミヌだが、ストーリー展開の主導権を握っているのはミミ。このミミを演ずる1988年生まれのエ・ヨニは、映画初主演作の『百万長者の初恋』(06年)で強く印象に残った美少女(『シネマルーム13』128頁参照)(ちなみに、そこではヨンヒと書いたが、これはパンフレットのとおりに書いたもの。若干の発音と表示の仕方の相違でエ・ヨニと同じ女優)。

そんなミミがミヌにつきまとっている(?)のは一体なぜ……？そして、彼女はミヌに何を求めているの……？

映像美と音楽の融合は？

チャン・イーモウ

張藝謀監督の1987年のデビュー作『紅いコーリャン』は、骨太のストーリーと圧倒的な迫力の演技がすばらしかったが、同時にビックリしたのが赤を基調とした映像美。『影武者』(80年)をはじめとする黒澤明監督作品の特徴も色彩、映像美だが、実はイ・ミョンセ監督が映像美に人一倍こだわる人であることは、『デュエリスト』を観れば明らか。

『デュエリスト』が際立っていたのは、こだわりの映像美と音楽との融合で、これは北野武監督の『座頭市』(03年)と同じように大成功だった(『シネマルーム10』117頁参照)。そんな映像美へのこだわりと美しい音楽との融合を、イ・ミョンセ監督がこの映画でも徹底的に追求したことは、映画冒頭の凝った色彩からも明らか。

この映画はストーリー的に少しわかりにくいという欠点(?)があるものの、それを補って余りある映像美と音楽との融合を楽しみたい。

現実の世界と幻想の世界の接点は？

谷崎潤一郎原作の『白日夢』(64年)はかなりエッチな映画で、吉行淳之介原作の『砂の上の植物群』(64年)と共に、中・高校生時代の私が観たかったのに観れなかった作品。

今、ミヌが不眠症に悩まされているのは、作家なら誰でも1度は陥る(?)自分が書くものはこれでいいのか? という悩み。今、彼はいつも誰かに見られているという恐怖感に襲われていたが、それはホント。すなわち、大好きなミヌをいつもすぐ側でじっと見守っていたのは、少女時代そのままのミミ。そして、ミヌがそんなミミとの白日夢の世界に入っていく空間としてセットされているのが、細い路地にあるバー「ルパン」。これは、別にどうってことのない昔からある普通のバーだが、口数の少ないバーテンダー(チョン・ムソン)が1人いる「ルパン」の中で、さてミヌはミミとどんな会話を……?

映像美その1 路地

イ・ミョンセ監督がこの映画で創り出す映像美はたくさんあるが、ハッキリ目立つのは①路地、②ミヌのマンション、③日本料理店の3つの空間。まず第1に狭い路地

は、光が上から降り注ぐだけだから暗く、闇の部分が多い。したがって、明暗のコントラストが顕著で、この路地を舞台とする追っかけっこ(?)は意味がよくわからないものの、現実の世界から白日夢の世界に入ってきたなというイメージだけは明確になる。

ちなみにプレスシートによると、ここは実在する忠武路のチニャン商店街の路地とのことだが、それをカメラを通してこんな幻想的な雰囲気に変えてしまうところが、イ・ミョンセ監督の技術!

映像美その2 ミヌのマンション

この映画ではヒロインをミミを演ずるイ・ヨニに譲っているが、ミヌの婚約者ウネを演ずるコン・ヒョジンとは、私が10月1日観ることになっている『ハピネス』(07年)で大韓民国映画大賞女優助演賞を受賞した女優。ところがイ・ミョンセ監督は、そんなコン・ヒョジン扮するウネよりもウネとミヌが住んでいるマンションの美しさを売り込むことに熱心なよう……?

大阪都心部の超高層マンションの最上階で120m²を超えれば億ションだが、ワンフロアのウネのマンションは優に200m²以上はありそう。しかも、全面ガラス張りのようなイメージでラフに仕切られた部屋は、まるで迷路のよう。ここはミヌの職場も兼ねているから、不眠症のミヌが1人起き出して職場に座ることもあるのだが、そんなミヌを心配して起き出してきたウネとの間で交わされる会話はひどくトンチンカン。これでは、ミヌとの結婚式を控えたウネが不安になるのはやむをえない。その結果、2人の間にひと波乱起きるのは必然だが、さて、白日夢とは別のそんな2人の現実生活の行方は……?

映像美その3 高級日本料理店

韓国でも中国でも日本料理店はあるが、私の目には高そうだし、わざわざ韓国や中国で日本料理を食べる必要はないから1度も入ったことがない。しかして、ミヌが編集長(ソ・ドンス)から接待されて入る高級日本料理店は……?

編集長はなぜ、とりあえずビールとクエを一皿注文するの? なぜ、空調が嫌いで扇風機にするの? なぜ、強引に人の上着をハンガーにかけようとするの? 韓国流の接待の仕方は私にはよくわからないが、これって現実、それとも白日夢……? も

っとも、この日本料理店は2度、3度登場するし、ミヌと編集長のやりとりのパターンもさまざまに変化するから、きっと現実が半分、夢が半分……？

こんなシーンを観ていてよくわかるのが、いつも大きな声でしゃべる韓国人気質。接待する立場の編集長が勝手なペースで大声で話しかけるのはよく見る風景だが、あるところで立場が逆になったミヌが、編集長に対して大声で怒鳴る姿は圧巻！ 凝りに凝った日本料理店の座敷空間の美しさとともに、2人の男のコメディっぽいやりとりにも注目したい。

2008(平成20)年9月13日記

ミニコラム

25勝25敗の好敵手は？

渡辺明竜王に羽生善治4冠が挑んだ第21期竜王戦は、3連敗後の4連勝という離れ技で08年12月18日渡辺が竜王を防衛し永世竜王の称号を手にした。気落ちした羽生はこれでしばらく低迷？ そうならないところが羽生のすごさだ。

1996年には竜王、名人、棋聖、王位、王座、棋王、王将の7冠王という前代未聞の偉業を成し遂げたのが1970年生まれの羽生。09年2月17日現在1055勝400敗とただ1人7割超の驚異的な勝率を誇る羽生は、当然すべての棋士に勝ち越し？ それはその通りだが、実は09年2月11日時点で50戦して25勝25敗と全く五分の成績になった棋士がいる。それが、現在対戦中の第58期王将戦で2月11日現在1勝2敗と羽生の敗けが先行した深浦康市九段だ。深浦は

タイトル初挑戦となった96年の王位戦で羽生王位に敗れたが、07年には11年ぶりに再度羽生王位に挑戦し、4勝3敗で初タイトルを獲得。そして08年には、羽生のリターンマッチを4勝3敗で退けて王位を防衛した。08年には史上39人目の600勝達成棋士となった深浦の勝率0.681は、羽生、大山康晴、中原誠に次ぐ歴代4位というすばらしさだ。

2月18・19日の王将戦第4局は羽生が制して目下2勝2敗のタイ。今回もフルセットの熱戦にもつれ込みそうだ。森内俊之、佐藤康光、藤井猛などに比べると少し地味だが、1972年生まれの深浦は羽生世代を代表する1人。今後存在感タツプりに羽生キラーぶりを発揮してほしいものだ。

2009(平成21)年2月24日記